

「末松謙澄と演劇改良」



けんちょう
末松 謙澄
(1855～1920)

末松謙澄が勇躍イギリスに向かった明治11年2月、乗船したフランス客船には52人もの日本人が乗り合わせていました。その多くは同年に開催されたパリ万博要員で、その中には謙澄の水哉園時代の学友吉田健作

や、当時肖像画家として一家を成しながらも、更に日本最初の官立美術学校である工部美術学校で招聘イタリア人画家フォンタネージに西洋絵画を学んでいた山本芳翠もいました。

謙澄はイギリス到着後の5月、父親に次のように書き送っています。「芝居をたびたび見に行っています。英国の風俗を知り、言語動作を知るうえで役に立ちます。英国の舞台の組み立てなどは日本の芝居の及ぶところではありません。(中略)絵の修業のためにフランスに行く山本芳翠とは同じ船でしたが、彼はしきりに日本の芝居を改革するべきだと語っており、私も彼を助けていつの日か改革に取り組まなければならないと考えています」この時期に謙澄は早くも日本の演劇を改良するのだという志を持っていたことがわかります。

ちなみに山本芳翠はパリでアトリエを構え、本格的に西洋絵画の勉強に取り組む一方で舞台美術の研鑽にも励みます。芳翠がパリで描いた裸婦像は現在、国の重要文化財に指定されていますし、帰朝後はそれまで日本に無かった舞台装置を作り上げて評判を呼びます。

イギリスでの謙澄が時間を見つけては演劇鑑賞をしていたことは、純国産軍艦「清輝」が初めてロンドンに到着した折に、艦長の井上良馨を演劇鑑賞に誘って、本場イギリスの演劇を一緒に見ていた事実からも想像できます。

謙澄は明治18年の帰朝後、外務大臣井上馨、東京日日新聞社長福地源一郎や実業家渋沢栄一などに呼びかけ、歌舞伎の守田勘彌や市川團十郎などを加えて「演劇改良会」を組織

し、翌年に同会として「演劇改良意見」を公開しました。その内容は、町人たちの娯楽であった芝居を上流階級や中流階級の鑑賞に堪えるように改良することを第一として、脚本家の著作権を守ることと、升席の芝居小屋を改良して音楽会などにも利用できる本格的な劇場を建設することの3点でした。「近代演劇、近代戯曲ひいては新劇運動さえこの演劇改良運動によって飛躍的にその実現に近づいた」と演劇学者の河竹登志夫は功績を讃えています。

特筆すべきは明治20年に明治天皇に歌舞伎をご覧いただく「天覧歌舞伎」をプロデュースしたことです。天覧歌舞伎は前代未聞の出来事であり、これによって歌舞伎は文化としての市民権を獲得し、現在の盛況につながっています。当時の名優九世市川團十郎は17歳年下の謙澄を「末松の兄さん」と呼んで大変尊敬していたと言われています。当時の文明開化の潮流の中で、政府の新しい演劇政策を理論化してその骨子を作りあげ、組織化し実現に向けた運動にまで導きながらも、一方で伝統演劇の歌舞伎を擁護したのは謙澄であったことを忘れてはなりません。

(文化人末松謙澄を考える会
植田義浩)



▲若き日の謙澄(左)と山本芳翠(右)